四 結論

このような問題を抱え、将来の課題も残っているが、宮下雄一郎君の本論文は、国際秩序に関する国際政治論・国際政治史の研究として、欧州統合史として、さらには第二次大戦期フランスを実証的に分析したフランス地域研究として、学界に対し多大な貢献を行ったことは明白であり、その意義は誠に大きいと言える。

よって審査員一同は、本論文が、博士(法学)(慶應義塾大学)の学位を授与するに十分値するものと判断し、その旨を報告する次第である。

二〇〇八年九月二四日

主査	慶應義塾大学法学部教授	田中	俊郎
副査	慶應義塾大学法学部教授	赤木	完爾
副査	慶應義塾大学法学部教授	田所	昌幸

倉科岳志君学位請求論文審査報告

一 はじめに

倉科岳志君より提出された博士学位申請論文「クローチエの思想とその時代(一九〇二—一九二五)」の目次は次のようになっている。

本論文の構成は以下のとおりである。

序文

第一部

第一章 文化における組織と戦略

- 1 はじめに
 - 2 本と雑誌のコラボレーション
 - 3 ナポリからイタリアへ
 - 4 学者の仕事と市民の仕事
 - 5 文化の支配から防衛へ
 - 6 まとめ
- 第二章 観念論の復興
- 1 はじめに

- 2 精神哲学、『クリティカ』、『現代哲学古典全集』
- 3 「経済の哲学に帰せられる法の哲学」と『実践の哲学』
- 4 『美学』第三版と『論理学』第二版
- 5 まとめ

第三章 バトリオティズム

- 1 はじめに
- 2 イタリア文学史
- 3 クローチエのデ・サンクティス評
- 4 歴史叙述の方法
- 5 歴史観
- 6 まとめ

第四章 イタリア・ナシヨナリズム

- 1 はじめに
- 2 イタリア人のコンプレックス
- 3 E・コッラデーニによる戦争の美化
- 4 G・パビーニによる民主主義批判
- 5 G・プレッツォリーニによる実践的提案
- 6 まとめ（イタリア・ナシヨナリズムのその後）

第二部

第五章 新知識人の世代間対立

- 1 はじめに
- 2 共通の目標…イタリアの哲学的再覚醒
- 3 クローチエの知的覇権

- 4 別離とその意味
- 5 まとめ

第六章 行動的観念論

- 1 はじめに
- 2 哲学の政治
- 3 行動論的観念論への批判
- 4 クローチエの政治的立場
- 5 ジェンティーレの政治的立場
- 6 愛国的哲学者の仕事
- 7 まとめ

第七章 若者たちの参戦論

- 1 はじめに
- 2 新権威クローチエ
- 3 人生の目的の相違
- 4 文化の革命と政治の革命
- 5 革命と戦争
- 6 まとめ

第八章 観念論としての自由主義

- 1 はじめに
- 2 倫理学と政治学
- 3 道徳意識の「退廃」論
- 4 「自由」の成立
- 5 ファシズムとの対決

6 まとめ

結論

このうち各章の多くは査読を経た上で雑誌『日伊研究』や日本政治学会、社会思想史学会の機関誌に掲載、もしくは掲載予定の論文とほぼ同じものであり、残りも倉科君の編著『ファシズム前夜の市民意識と言説空間』に発表された論文が原型となっており、その意味で大半が既発表の論文ということになるが、全体としては一貫した意図のもとに執筆したのではなく、論文集の体裁をとっている。その意味で重複は避けがたいが、全体の筋はたどることができるとする。

二 本論文の位置づけ

クローチェはグラムシと並んで二〇世紀前半のイタリアの思想家のなかでもっとも注目されてきた人物の一人であり、すでに戦前から日本の知的世界でその名は知られていた。主著の『美学』やその「ゲテ論」「ヴィーコ」論は翻訳されているし、歴史家としてのクローチェについては羽仁五郎の開拓的な研究があり、戦後にもクローチェ研究の個別的論文は北原敦や上村忠男らによって散発的には

あるが発表されているが、意外にも「クローチェ研究」と銘打った本格的な研究はなく、その意味で本論文は日本におけるクローチェ研究の開拓的研究の一つと言つてよい。

本論文の主題はタイトル通り「クローチェの思想とその時代」を説明することにある。本論文は単に「クローチェの思想」の研究を目指すのではなく、同時に「その時代」をも取り上げる。この場合「その時代」とは社会経済的世界や政治的世界を意味するというより、イタリアの知的世界を指している。クローチェは一八六六年に生まれているが、アメリカの思想家スチュアート・ヒューズはその著書『意識と社会』の中で「近代」と「現代」の間の過渡期に位置し、現代思想の扉を開いた一群の開拓的思想家を「一八九〇年代の世代」と呼び、その代表的人物としてフロイトやマックス・ウェーバーと並んで本書の主人公クローチェの名前を挙げている。

クローチェは同時代の多くの知識人と違い大学は卒業しておらず、大学を拠点とするのではなく、当時台頭しつつあった文化産業、マスメディアを拠点に文化活動を行った。大学を拠点とするひとたちを制度的知識人と呼ぶとすれば、クローチェは非制度的な文化市場に依拠した知識人であると言えよう。その意味でクローチェにとって文化市場で地

位を確立することが不可欠であり、本論文において倉科君がクローチエの「文化戦略」を重視する（特に第二章）理由もここにある。ヒューズの言う「一八九〇年代の世代」とは主として一八六〇年代に生まれ、一八九〇年代に著作活動を開始したひとびとを意味するが、クローチエもやはり一八九〇年代に論文を発表し始め、そうした活動は一九〇〇年代に様々な著作に結実する。それと同時にクローチエは様々な雑誌、知識人集団とかかわり（特に第二部）、その過程で「知的覇権」を確立していき、一九一〇年頃にはイタリアを代表する知識人の地位を不動のものとするに至った（第五章）。そうした威信を背景に一九一〇年代には政界にも進出し、一九一〇年には上院議員に、第一次大戦後にはジョリッティ政権の公教育大臣の地位についている。ジョリッティ政権に代わるファシズムに対しては一時期支持する姿勢を見せるも、すぐに反旗を翻すにいたった。本論文が研究対象とするのは、二〇世紀に入ってからクローチエが「知的覇権」を確立していく時期から始まり（主として第一部）、若い世代の知識人との連帯から離反へと至る時期（第五、六、七章）を経て、最終的にはファシズムと対立するに至る一九二〇年代半ばまでの時期（第八章）である。以下もう少し詳しく本論文の内容を紹介しよう。

三 本論文の要旨

一八世紀末から一九三〇年代にかけてのヨーロッパ諸国において、知識人が社会的一団として、文化・思想・学問の分野で重要な役割を果たした。先にも触れたように、大学教授に代表される制度的知識人に対して、クローチエは出版ジャーナリズムを媒介すると言う意味で文化市場に依拠していた「自由な知識人」の方のタイプに属する。イギリスやフランスではすでに一九世紀前半に「自由な知識人」を経済的に支えるだけの文化市場が成立していたが、一九世紀後半になってようやく国家的統一を果たしたドイツやイタリアの場合は、広汎な文化市場を形成するだけの資本主義的發展が遅れ、ようやく二〇世紀への「世紀転換期」になって「自由な知識人」の台頭が見られるにいたった。ただし作家、芸術家、弁護士などが「自由な知識人」の代表的な職業であるのに対し、クローチエは著作のタイトルや内容から言っても、政治、歴史、哲学、美学といった学問分野を拠点としており、知識人として安定的な生活基盤をえるには、出版社との関係がことのほか重要であった。倉科君はこのような意味でクローチエとラテルツァ出版社との友好的関係を取り上げ（第一章）、クローチエが「ナ

ボリの哲学者」からイタリアのオピニオンリーダーへと台頭していく過程を描くとともに、知識人として単なる伝統的な教養人タイプではなく、「文化における組織と支配の技術」を持つ技術的タイプの知識人であったことが明らかにされる。

第二章は一九〇二年から一九〇九年に至るクロッチェ思想の内在的展開を扱っており、本論文のなかでも特に読み応えのある箇所になっている。倉科君によれば、一九世紀末、実証主義に支配されたイタリアの知的世界にあつてクロッチェは単に実証主義を否定し、人文主義的伝統に加担するのではなく、両者の統一を目指しており、本論文はその際の理論的基礎として、クロッチェが独自の「功利的精神」乃至「有用原理」論を確立したこと、諸領域の自律性を尊重する「区分」の論理を確立したこと、そうして学問における「直観」の意義を明らかにしたことを重視している。さらに倉科君はこうしたことを明らかにするに際し、この時期の「美学」「論理学」「実践哲学」の相互関係をこねら著作の各版の相違にまで着目しクロッチェ思想の形成過程を追及している。

第三章では、クロッチェの文化活動を支えていた情念は「パトリオティズム」であり、その源泉がデ・サンクテイ

スの『イタリア文学史』における叙述、とりわけ「イタリア的生活」にあることが明らかにされている。

第四章ではノルベルト・ボツビオの研究を受け、クロッチェと似た情念を共有し、『クリティカ』『レーニョ』『レオナルド』といった雑誌に依拠していた同時代の知識人コツラディーニ、パピーニ、プレッツォオリニらの思想がイタリア・ナシヨナリズムをキーワードに分析されている。パトリオティズムのナシヨナリズムへの転換は興味をそえられるテーマであるが、この問題を取り上げたムリツィオ・ヴィローリの『パトリオティズムとナシヨナリズム』（一九九五）はマッツィーニの時代までしか視野にいない。とくにコツラディーニにおいてナシヨナルリベリズムの観点とナシヨナルソシアリズムの観点があり、両者の接点が模索されているとの倉科君の分析は興味深い。それとクロッチェ思想との影響関係は必ずしも明らかにされていない。

第五章ではイタリアの指導的知識人へと上昇したクロッチェの若い世代の知識人への影響関係と対立面とが取り上げられる。「知的覇権」を獲得したクロッチェはかれの周辺に形成された知的ネットワークを通じて大きな社会的影響を行使しえるようになった。そこには大学教授も加わっ

ていたが、中心となるのは作家、ジャーナリスト、出版人といった新しいタイプの知識人であった。これらのネットワークは社会的地位のあるメンバーが多かったこともあって社会的影響力は大きかった。のちになって中心人物のクローチエはジョリッティ政権の公教育大臣に、ジェンティレはムッソリーニ政権の公教育大臣に就任している。のちの経歴も示唆しているようにこのネットワークはまとまった思想集団ではなく、第一次大戦への参戦問題をきっかけに分裂、離散していくことになるが、倉科君は対立の萌芽を中心人物クローチエとプレッツォリーニの理論と実践のとらえ方の相違に求め、領域区分を尊重し、学問的真理の追究を本義とするクローチエと学問的真理よりも社会的影響力を重視するプレッツォリーニの立場の違いを明らかにしている。

第六章は当初『クリティカ』誌で協力関係にあったクローチエとジェンティレの離反を扱っている。イタリアの参戦をめぐるクローチエの意見には決然としたところがなく、曖昧な印象をあたえかねない。反戦論と読める発言もあれば、参戦支持とも読める発言もある。盟友ジェンティレによって、クローチエの立場は「中立」論、つまり判断を保留していると受けとめられた。クローチエと「行動

論的観念論」者ジェンティレの離反も基本的には、プレッツォリーニの場合と同様、学者的態度と実践家の態度の相違に由来する。ジェンティレが教育や戦争を通じて大衆を巻き込み、自らの政治的意図の実現を図ろうとしたのに対し、クローチエはイタリアの指導的階級に目を向け、研究、執筆、出版活動を通じて「政治的」貢献をはかろうとした、と倉科君は結論づける。

このようにクローチエが政治に対するスタンスを限定する以上、第一次大戦後のイタリアの言論界の動きは彼の手を離れていかざるをえず、一旦イタリアの言論界において知的覇権を握ったクローチエではあったが、彼の意図を超えて言論界が動いていくのをとめようがなく、特に若者たちの参戦論をめぐる事態は決定的なものとなった。第七章「若者たちの参戦論」はこの問題局面を取り上げている。第一次大戦をめぐるパビーニら若手の主張の変遷とクローチエの議論の展開を追い、両者が訣別するに至るプロセスを詳細に跡づけ、その延長線上で第八章においては、クローチエのファシズムへの対応を取り上げ、その態度を基礎付ける思想的根拠を「観念論としての自由主義」と題して取り上げている。本章では、まず一方でファシズムへの対応に際してクローチエの思想に重要な変化があったと見る

ノルベルト・ボッビオや北原敦の議論を「通説」ととらえ、これに対しクローチエはファシズム期においても彼の精神哲学体系における「政治と道徳の關係」を「転覆」させたわけではなく、むしろ「維持」し「精緻化」させながら自由主義を構築したとして、クローチエの思想の連続性を主張している。クローチエの「自由主義」は第一義的には、かれの精神哲学の内的要求に応じたものととらえられる。知的状況との関連で言えば、かつて二〇世紀初頭、「実証主義」との対決がクローチエの主たる問題意識であったとすれば、ファシズム期においては「自由」の対極に位置するとされる「退廃」に対する危機意識であったことが明らかにされている。

四 本論文の評価

先にも触れたように、二〇世紀前半のイタリアを代表する思想家としてはクローチエとグラムシの名前をあげるのが妥当なところであろう。しかし戦後日本におけるイタリア政治思想の研究はもっぱらグラムシを中心に研究されてきたと言っても過言ではない。グラムシ研究に比べてはるかに遅れていたクローチエ研究を一躍高めることになったのが北原敦の『イタリア現代史研究』（岩波書店、二〇〇

二年）所収の論文「クローチエの政治思想」（初出は一九六九／七〇）であったが、その北原のクローチエ研究でさえグラムシを通してクローチエを見ろという傾向が強かったように思われる。それだけイタリア現代史研究においてはグラムシの、さらに言えばマルクスの影が強かったわけである。北原の後の代表的な研究として、中川政樹の「クローチエにおける政治と道徳」をはじめとする一連の研究や、上村忠男『クリオの手鏡』（平凡社）所収の「ベネデット・クローチエあるいは〈哲学の政治〉について」などがあり、クローチエ研究を前進させたが、中川の論文は個別テーマについての研究であり、上村の論文はクローチエの学術的著作を中心とした研究である。これに対し倉科君の論文は特定の角度からではあるがクローチエ政治思想の全体像にアプローチを試みた、日本で最初の試みであると評価できよう。

一方イタリアにおけるクローチエ研究は戦後に限ったとしても膨大な量にのぼると思われる、「クローチエの政治思想」に關係する、あるいは「クローチエと政治」「クローチエにおける政治」といった類の研究にしても多数存在する。これら先行研究について指摘できる点は、時代的にも研究の細分化が進み、相互交流が乏しいことであろう。そ

うしたなかで細分化の弊害を克服し、総合化を目指す視点をもっていたのが、ポツピオとサルトリの研究である。

一九九〇年代になると、クローチエの広大な知的営為を全体的にとらえなおそうとする動きが活発化し、これまで等閑にされていた文献学的な研究作業も本格化する。倉科君の研究はこうした新研究に倅さすもの、というよりその先頭にたつものと位置づけられる、きわめて注目すべき業績であり、とくに文献学的な緻密さ、徹底性ではイタリアの研究者を凌ぐものがある。

本論文の評価すべき点を具体的に言えば、さしあたり以下の三点に求められよう。第一に、クローチエ自身を、そしてクローチエの政治思想を同時代イタリアの「知のインフラストラクチャー」との関連で見えていく、という倉科君の研究視点の独自性である。大学教授のような知識人たちが、安定的な知の拠点を持たないクローチエのようなタイプの知識人にとって出版社や諸々の雑誌、あるいは知識人集団とどのような関係をとる結ぶかは、その知的生産にとって無視し得ない重要性をもっている。倉科君はクローチエの書簡集なども利用してラテルツァ出版社との関係や、同時代のコッラディーニ、パピーニ、プレッツォリオーニ、ジェンテレーレとの関係を雑誌『ヴォーチエ』、『クリテ

イカ』、『レオナルド』などとの関係において取り上げながら、クローチエ政治思想の展開過程をあとづけることよつて、クローチエ政治思想を多面的にあきらかにしている。雑誌の予約購読者数の地域的分布まで調べ上げたのは重要な貢献であろう。

第二に、クローチエ思想の草創期の思想的展開を詳細に追及した点に本論文の功績がある。クローチエ思想の骨格は一九〇八／〇九年に「精神哲学」三部作でほぼ完成をみたとされており、倉科君もこの点には同意している。一九〇〇年代はクローチエにとつてただならぬ結晶の時期でもあり、かれは多くの著作を著しただけでなく、おのれの著作の新版刊行に際し書き換えをおこなっている。例えばこの時期、『美学』にしても一九〇二年の初版以降一九〇八年の第三版にいたるまで内容の修正、展開があるし、『論理学』にしても初版と第二版とで修正、展開がみられるだけでなく、一九〇九年には『実践の哲学』を公刊している。倉科君はこれらの著作、各版の異同を明らかにし、クローチエ思想の形成過程を丹念に追及した。この種の試みは日本においては勿論のこと、イタリアにおいても為されておらず、本論文の重要な貢献であると言つてよい。同君の獨創性は、他の研究者がクローチエの精神哲学体系を所与の

ものとして受け取り、その解説、解釈に終始しているのに
対し、三部作の各版次を編年的に読みかつ同時期に書かれ
た他の作品や書簡までも組み込んで、クローチエの精神哲
学体系が形成されてゆく過程の思想的ドラマというべきも
のを明らかにしている点にある。過去のクローチエ研究の
なかにもこれほど緻密な作業はなかったのではないかと思
われる。

第三に、資料解説の徹底性は、「反ファシズム宣言」に
いたるクローチエ思想の、連続か変化かという問題にも適
用されている。日本のクローチエ研究の初期の代表者の羽
仁五郎はクローチエを一貫して「自由の戦士」として描き
出しているが、一般には一九二四／二五年頃にクローチエ
思想に変化があったと見るのが通説かと思われる。この一
定の変化を認めた上で、当時クローチエが根本的に思想的
立場を変えたと見るか、それとも依然として一貫していた
と見るかで研究者の意見の対立があり、「変化」説の方が
通説になっているように思われる。イタリアではすでに一
九五五年にイタリア政治学・思想史の泰斗ノルベルト・ポ
ツピオが『政治と文化』において「変化」説を説き研究史
に大きな影響を与え、日本では北原教も基本的には「変化」
説にたつた議論を展開しており、その後も中川政樹や中村

勝巳も基本的には同様の見解を示しているように思われる。
ただしポツピオはのちに一九九〇年の『イタリア・イデオ
ロギー』において微妙に軌道修正をおこなっている。「連
続」説としては日本の上村忠男がおり、本論文はその意味
では上村説を継承しているとも言えるが、本論文の方が詳
細、かつ本格的な研究になっている。

とはいえ本論文にも問題点がないわけではない。全体と
してみれば、本論文が書き下ろしではなく、論文集という
スタイルをとっていることに由来する問題点を指摘できよ
う。繰り返しが多くなるのはやむをえないにしても、章に
よって問題意識にズレがあるため同じ事柄が章によって違
った扱いになり、本論文全体の論旨をわかりにくくしてい
るところがある。書物として公刊する際には叙述をより工
夫することが望まれる。問題点を具体的に言えば、以下の
諸点になろう。

第一に、第四章ではイタリア・ナシヨナリズムとの関連
で、パピーニ、プレッツォリーニ、コッラデーニの三人
とクローチエとの関連が取り上げられており、話としては
面白い内容になっているが、それがクローチエ思想の理解
にどの位役立つかは必ずしも十分に明白にされていると
は言えない。その際第三章の分析は他の章と比べて物足り

ない叙述に終わっている。

第二に研究史への配慮の不十分さである。本論文の各章で研究史のサーヴェイが一応おこなわれて特にイタリア語の文献は多数取り上げられているが、それらの研究に関する叙述は概して短く、論評が不十分のまま否定的評価が下されている場合が多い。論文のオリジナリティを主張したためとも思われるが、従来の諸研究の主張を具体的に例示した上でその問題点を指摘するのであれば、本論文の独自性もより鮮明になったものと思われる。例えば倉科君はノルベルト・ボツビオがパピーニやコツラデーニ、プレツォリーニらを「非合理主義」にひとくくりして、これらの個人的な感情の次元まで明らかにしえていない、とボツビオを批判しているが、論拠は示されておらず、ボツビオの主張をいささか単純化していると言わざるをえない。

第三に、大戦中から大戦直後のクローチエに「時代批判」の視座の形成を読み取り、そこから「反ファシズム宣言」に連続させていく倉科君の議論は興味深いが、論証がやや性急になるくらいがあり、より慎重な議論の展開が望まれる。

しかしこうした問題点はあるものの、自説を展開するに

当たって誰よりもクローチエを読み込みイタリア語の文献を広く渉猟した倉科君の本研究は、日本における最初の本格的なクローチエ研究であることはまちがいになく、審査員一同本論文は法学博士（慶應義塾大学）を授与するに値するとの結論に達した。

二〇〇八年一〇月三日

主査	慶應義塾大学法学部教授 法 学 博 士	蔭山 宏
副査	慶應義塾大学法学部教授 P.h.D	堤林 剣
副査	東京大学大学院 法学研究科教授	馬場 康雄